

グスターヴォ・コルニー/ホルスト・ギース『血と土 ーヒトラー国家における人種的イデオロギーと農業 政策ー』

熊野, 直樹
九州大学法学部助手

<https://doi.org/10.15017/16347>

出版情報：政治研究. 42, pp.85-100, 1995-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：



紹介

グスターヴォ・コルニー／ホルスト・ギース

『血と土―ヒトラー國家における人種的イデオロギーと農業政策―』

Gustavo Corni / Horst Gies, „Blut und Boden.“ *Rasensideologie und Agrarpolitik im Staat Hitlers*, Idstein 1994; Schulz-Kirchner Verlag, 227 SS. (*Historisches Seminar - Neue Folge*, Bd.5)

熊野直樹

一

本書は、ナチ党の農民指導者であるダレー(R. W. Darré)の「血と土」と称される農業イデオロギーと第三帝国の農業政策に関する史料集である。この史料集には編者のコルニー(G. Corni)とギース(H. Gies)によって、詳細な解題が付されており、この部分だけでもダレーの農業イデオロギーと第三帝国の農業政策の概観がわかるように配慮されている。編者の一人であるコルニーはポローニャ大学で歴史学

と政治学を学び、現在イタリアのトリエステ大学のドイツ史担当の教授である。彼の主たる研究は、第三帝国における農業政策であり、彼の主著『国民社会主義の農業政策 一九三〇―三九年 (*La politica agraria del nazionalsocialismo 1930-1939*)』が、『ユーターと農民 (*Hitler and the Peasants*)』として英語にも翻訳されている⁽¹⁾。もう一人の編者であるギースは、フランクフルト、ミュンヘンで、歴史学、ドイツ語学、政治学を学び、現在ベルリン自由大学の歴史教育担当の教授である。彼の主たる専門領域はナチスの農業政策であり、時期もヴァイマル共和国から第三帝国にわたっており、ダレーを中心としたナチ党が農民を獲得していく過程を詳細に分析した一連の研究⁽²⁾は、とりわけ有名である。ナチスの農業政策研究並びにダレー研究に関しては、国際学界において第一人者といえる両研究者によって編集された史料集だけあって、その史料の蒐集はかなり広範囲にわたってなされている。従来あまり利用されなかったり、さほど言及されなかった未刊行の文書館史料並びに同時代文献が数多く掲載されており、この分野の専門研究が他の分野に比べて必ずしも充実してはいなかっただけに、この史料集の刊行によって、

研究状況はかなり改善されたように思われる。こうした本書の重要性を鑑みて、本稿ではこの史料集の紹介を主として行うことにしたい。

以下ではまず、本書の構成について大まかな説明を行い、次に本書に掲載されている史料を紹介した後に、順序は本書とは逆になるが、編者による解題の内容をやや詳しく紹介したうえで、最後に評者が本書から示唆を受けた点を中心に若干の論評を行うことにしたい。

二

本書の内容を概観するために、目次をまず掲げることによ

一 研究対象

二 史料

A グレーと国民社会主義的農民イデオロギー

B ポリクラシイ的総統国家における帝国食糧身分団

C 世襲農場と植民問題

D 市場統制、「生産戦」並びにアウトアルキーの試み

E 軍備拡張期における危機の徴候と隘路

F 拡張された「生存圏」における戦時食糧経済

三 諸学説

四 研究文献

既に述べたように、「一 研究対象」において、本書に掲載されている史料の研究史上における意義並びにその説明が、簡潔明瞭に書かれている。ここでは、「二 史料」の配列に従って、史料の解題がなされている。この部分を読むだけでも、グレーの農業イデオロギーと第三帝国の農業政策に関する最新の研究情報が入手できるようになっている。後にやや詳しく述べることになるが、コルニーとギースの研究成果が要所要所に盛り込まれており、かなりオリジナルな内容を含んだ解題ともなっている。

「二 史料」においては、全部で一七三もの史料（統計も含む）が掲載されている。史料は、既に述べたようにかなり広範囲にわたって蒐集されており、このテーマに関する基本的かつ重要な史料は、かなり掲載されているといえる。とりわけ、各種の文書館史料やグレーの著作からの抜粋、さらには刊行史料から関連するテーマについての抜粋が収められてお

り、史料の所在の手引きにもなり有益である。本書の史料だけでなく、ダレーの農業イデオロギーや第三帝国の農業政策に閲してかなりの情報が取得できよう。

「三 諸学説」においては、本書のテーマに関する重要な学説の抜粋が、各テーマごとに配列されている。全部で一冊も学説が紹介されている。この分野の専門家でなくても、これまでの学説並びに現在の研究動向が概観できるように配慮されている。

最後に「四 研究文献」が付加されており、本書のテーマに関する研究文献が挙げられている。本書のテーマに関して重要な基礎的研究文献に限っては、ほぼ網羅されているといつても過言ではないであろう。⁽³⁾

以上が、本書のおおまかな内容であるが、以下では、広範囲にわたって蒐集された史料の基盤について紹介することにしてしよう。

三

本書に掲載された史料の特徴の一つは、コブレンツの連邦

文書館とゴスラーの市立文書館の二つに保管されているダレー文書である。このダレーの文書は、我が国でも既に早い時期から伊集院立氏や豊永泰子氏並びに中村幹雄氏によって、そのダレー研究において頻繁に利用されている⁽⁴⁾。しかし、この文書館史料は未刊行であったために、簡単には閲覧することができなかつた。本書においてゴスラー市立文書館とコブレンツの連邦文書館にそれぞれ所蔵されていた重要なダレー文書が、一部ではあるが一冊の史料集に掲載された点は、やはり特筆すべきであるといえよう。当然のことながら、出典として文書館名、文書名、Bestand 並びに Blatt の番号が記されているお陰で、コブレンツとゴスラー双方の文書館史料の検索が行いやすくなつた。

本書においては、研究文献の目録は巻末に記載されているが、残念ながら本書において引用された史料の文献目録は収録されていない。そのため本書の史料の基盤がどの程度のものであるかが、一目ではわからない。その欠を補う意味でも、以下、本書に掲載されている史料の出典を掲げることとする。なお、史料の蒐集状況を適確に把握するためにも、刊行された文献からの史料の引用については、ページ数を記すことに

米子仁政集

	Bd.199
	Bd.200
	Bd.202a
Archiv des Auswärtigen Amtes / Bonn	
Sonderreferat Wirtschaft, Bd. Getreide /6	Bd.207
Handakten Clodius, Bd. Jugoslawien 3	Bd.213
HaPol IVa, Ungarn, Bd. Handel 11/1	Bd.318a
Bundesarchiv / Koblenz	Bd.528
R 2, Bd.18021	Nachlaß Darré II
Bd.18039	Bd.4
Bd.18197	Bd.24
Bd.18249	Bd.54
R 16, Bd.1272	Bd.56
R 16, Zg.1971, Nr.2052	Bd.AD 14
Nr.2164	Bd.AD 24
Nr.2174	NS 10, Bd.54
R 26 IV, Bd.5	NS 22, Bd.851
R 43 I, Bd.1301	
Bd.1460	Bundesarchiv / Potsdam
R 43 II, Bd.193	0911, Bd.43012

2501, Bd.6583

31.01, RWMin, Bd.8435

Bd.9044

DAF, AWI, Zeitungen, Nr.9378

62 DAF 3, Bd.9393

Nachlaß Darré, Nr.81

Nr.85

Nr.378

Nr.437

Bundesarchiv / Militärarchiv Freiburg

Br., RW 19, Bd.2444

Bd.2448

Bd.2450

Bd.2451

Bd.2463

Bd.2470

行政档案

中央集權・血脈・操土黨案

Akten der Reichskanzlei. Regierung Hitler 1933-1938.

Teil I : 1933/34, 2 Bde., bearb. von K.H. Minuth, Bop-

pard am Rhein 1983, S.151ff, 829ff.

Akten zur deutschen Auswärtigen Politik, Serie D,

Bd.5, Göttingen, S.174ff.

Deutschland-Berichte der Sozialdemokratischen Partei

Deutschlands (SOPADE), Bd.2 (1935), Frankfurt am Main

1980, S.1155ff.

Reichsgesetzblatt 1933, Teil I, S.627, 667, 685, 1939, Teil

I, S.1520f.

Statistik des Deutschen Reiches, Bd.560, Berlin 1940, S.

166.

Document Center Berlin

Akte Backe

OPG-Akte Habbes

Stadtarchiv Goslar

Wirtschaft und Statistik, 14 (1934), S.572; 18 (1938), S.607; 23 (1943), S.210.

陸文正人物

Die deutsche Volkswirtschaft, Nr.10/1937, S.317.

Völkischer Beobachter, v. 6.10.1935.

回世文種

R. W. Darré, *Neuadel aus Blut und Boden*, München 1935, S.228.

R. W. Darré, *Um Blut und Boden. Reden und Aufsätze*, München 1940, S.18f., 26f., 102, 200ff., 208, 265ff., 300ff., 311, 314f., 317f., 332f., 341, 338f., 359f., 458, 481, 486.

R. W. Darré, *Aufbruch des Bauerntums. Reichsbauern-tagreden 1933 bis 1938*, Berlin 1942, S.39, 84f., 110f., 115f., 119, 122.

G. Feder, *Das Programm der N.S.D.A.P. und seine weltanschaulichen Grundgedanken*, 15. Aufl., München 1930, S.8f.

A. Hitler, *Mein Kampf*, München 1932, S.149ff., 740ff.

K. Hopp (Hg.), *Deutsches Bauernrecht (Textsammlung)*,

Berlin 1938, IV, 9, S.32f., 42f.

K. Meyer, *Landvolk im Werden. Material zum ländlichen Aufbau in den neuen Ostgebieten und zur Gestaltung des dörflichen Lebens*, 2. Aufl., Berlin 1942, S.21f., 361.

O. Mönckmeier (Hg.), *Jahrbuch der nationalsozialistischen Wirtschaft*, München 1937, S.216ff.

H. Reischle / W. Sauer, *Der Reichsnährstand. Aufbau, und Bedeutung*, 2. Aufl., Berlin 1937, S.26f., 210, 215.

H. Schacht, *Außenhandelsfragen*, o.O. o.J., S.14ff.

M. Sering, *Erbhojrecht und Entschuldung unter rechtsgeschichtlichen, volkswirtschaftlichen und biologischen Gesichtspunkten. Als Manuskript gedruckte Denkschrift*, Altenburg / Thüringen 1934, S.39ff.

陸文種

A. Barkel, *Das Wirtschaftssystem des Nationalsozialismus*, Köln 1977, S.182.

A. Hanau / R. Plate, *Die deutsche landwirtschaftliche Preis- und Marktpolitik im Zweiten Weltkrieg*, Stuttgart 1975, S.21, 24.

W.G. Hoffmann, *Das Wachstum der deutschen Wirtschaft seit der Mitte des 19. Jahrhunderts*, Berlin 1965, S. 274, 320, 454f., 526, 554ff., 585ff.

M. Jatzlauk, *Untersuchung zur sozialökonomischen Struktur der deutschen Landwirtschaft 1919-1939*, Diss. Rostock 1983, S.70ff.

J. Lehmann, *Untersuchungen zur Agrarpolitik und Landwirtschaft im faschistischen Deutschland*, Diss. Rostock 1977, Tabellen 10, 13, 20, 22, 29, 41, 47, 70, 73, 82.

Vierteljahresshefte für Wirtschaftsforschung, 13 (1938/39), S.41ff.

Vierteljahresshefte für Zeitgeschichte, 3 (1955), S.204ff.

L. Zünpe, *Wirtschaft und Staat in Deutschland 1933-1945*, Berlin / Vadus 1980, S.173.

以上からも、本書がいかに広範な史料的基盤に支えられた史料集であるか、理解できよう。その際、一七二の史料のなかで、約一二〇の史料が未刊行の文書館史料からの引用である。なかでも、とりわけコブレンツの連邦文書館からの引用が多いことに一目で気付くであろう。また、刊行史料に関し

ていえば、ダレーの演説並びに論文集である『血と土について (Um Blut und Boden)』の中からの引用が目につく。ただ、史料の引用がダレーの著作すべてからなされているわけではない。ダレーの「血と土」イデオロギーを考える上でも重要な位置を占める『北方人種の生命源としての農民身分 (Das Bauerntum als Lebensquell der Nordischen Rasse)』⁽⁵⁾からの引用はないのである。確を得て蜀を望むようであるがこのダレーの著作に何らかの形で触れた方がよかつたのではないだろうか。

以上が、本書に収められている史料の概観であるが、次にはこの史料に関する解題について見ていくことにしよう。なお、この解題の内容は多種多様な史料を反映して多岐にわたっており、ここではすべてを網羅的に紹介することは困難である。そのため、以下では評者がとりわけ興味深いと思われる点について、紹介するにとどめることをあらかじめお断りしておく。

四

まず「A ダレーと国民社会主義的農民イデオロギー」では、ダレーがナチ党に入党した経緯と入党後ナチスの農民指導者として農民を獲得していく過程が、彼の農業イデオロギーとともに紹介されている。ここで目につくのは、彼の「血と土」と称せられる農業イデオロギーに占める農民身分の重要性に関する指摘である。すなわち、ダレーにとって、農民自身は食糧確保の機能と並んで、「北方人種」の「血の若返りの泉」であるといった課題を満たしているが故に、農民身分は国家の「支柱」となるべきとされた。また、農民の結婚はダレーにとって、「民族の行為」並びに「北方化」すなわち「血と土よりなる北方貴族」の養成として見なされていたことが紹介されている。

こうした「血と土」イデオロギーに、二つの時代的潮流、すなわち「人口政策的—優生学的」潮流と「身分的、または農民身分的政策」の潮流が流れ込んでいたことも指摘されている。とりわけこうした潮流が一九世紀から由来するもので、

ダレーらの「血と土」イデオロギーを一九世紀の精神的な時代的潮流からの連続のなかに位置づけていることは興味深い。その際、ダレーの思想の新しい点として、彼が土地を人種的な北方化といった意味での血統のための義務と結び付けて、「血の思想の一部」として理解したことが指摘されている。

彼の農業政策については、ヒトラー内閣における初代の食糧農業相フーゲンベルク(A. Hugenberg)が失脚した後、「血と土の世界観」を「新たな農民の権利」に組み入れようとしたが、結局は失敗に終わったことが強調される。その理由として、ヒトラーの世界支配構想を挙げ、その実現化には軍需産業の拡張が必要であり、再農業化は前提ではなかったことが指摘されているのである。また、ダレーの政治的影響力の喪失の原因として、農業政策が一九三五／三六年以降、軍備拡張並びに戦争準備に従属しなければならなかったことを挙げていることは重要である。すなわち、ダレーの政治的影響力の喪失を、「血と土」政策が戦争準備のための政策には合わず、軍備拡張政策にとつては、ダレーの政策は非現実的であったことが強調されている。その結果、食糧省次官のバック(H. Backe)に食糧省の実権は移り、さらには農業を含む経済全体

の指導権はゲーリング(H. Göring)の下に移り、彼の支配下の四カ年計画庁を通してダレーの権力は喪失していったことが指摘されている。ここでとりわけ重要なのは、第三帝国下においては、農業政策は実質的には軍備拡張政策に従属し、ダレーの「血と土」のような農業独自の政策の実現はかなり困難であつたことである。

次に「B ポリクラシイ的總統国家における帝国食糧身分団」の内容について紹介しよう。再軍備と「軍事経済」の優位のなかで農業諸利益の実現はどのようにみなされていたか、といった問題に対して、農民は一九三七年の「生産戦」の圧力の下で苦しんでいたことを、ダレーの演説の内容を例として挙げながら触れている。「身分制国家」への道は、帝国食糧身分団の場合にも全く幻想にすぎなかつたことが紹介されている。また、帝国食糧身分団と食糧省並びにゲーリングの四カ年計画庁との権限争いのなか、ダレーは一九四二年には農民指導者の地位を次官のバッケに譲り渡して、事実上失脚したことが述べられている。

「C 世襲農場と植民問題」においては、これらの問題とダレーのイデオロギーとの関わりについての解説がなされてい

る。まず、世襲農場についてであるが、これはダレーにとつては「北方人種の」家系を土地に根付かせるための寄与であり、これ以外のものはすべて副次的にしか取り扱われなかつたことが指摘されている。土地は北方人種の養成の場として役立たなければならぬ、として土地の最も重要な機能がここに見出されている。それ故、ダレーが「農民」と「経営者」とを区別したことから窺えるように、国民経済や食糧経済は二の次であつたことが指摘されている。また、世襲農場が東部における大土地所有の創設には障害となつたことも言及されている。ここで興味深いのは、「離村(Landflucht)」を防ぎ止めるために公式に設立された世襲農場がまさに「離村」を助長させたことが指摘されていることである。しかも、世襲農場によつて土地不足となり、土地が高価になつたために、内地植民や農業労働者並びに青年農民の社会的上昇が困難になつたこともまた紹介されている。また、ダレーの「血と土」イデオロギーにおける「北方ゲルマン人種」の「新貴族」の創設といった人種政策が、その後の国防軍による東方占領地域における人種の抹殺の背景にあつたといった指摘は、ユダヤ人の絶滅政策や「スラブ人の奴隷化」政策を考える上で重

要な視点を提供しているといえよう。

続いて「D 市場統制、『生産戦』並びにアウタルキーの試み」の紹介に移ろう。ここでは、まずダレーの市場統制の構想が基本的には伝統的保守派の構想を踏襲していたことが指摘され、とりわけ、酪農品や油脂の市場統制政策は彼の前任者であるフーゲンベルクの「油脂計画 (Fettplan)」を始めた農業政策を模範として踏襲したことが強調されている。

にも拘らず、帝国食糧身分団による市場統制は逆に農民の不満を買い、ますます批判されるに至ったことが言及されている。また、「生産戦」においては、外貨不足に悩むドイツ経済省とダレーとの間で穀物不足を補うための外貨の準備をめぐって激しい争いがなされ、結局は食糧不足による民衆の不満を恐れたヒトラーの指令によって穀物輸入のための外貨が準備されたことが紹介されている。ここで特に興味深いのは、東南欧政策として結実するヒトラーの広域経済圏構想が、「農業保守派のサークル」の抱く構想と一致しており、しかも大工業によっても支持を受けていたことの指摘である。その際、ダレーは「ドイツの生存圏の拡大」の決定的な牽引者であったことが強調されている。にも拘らず、東南欧諸国からの農

産物輸入の総量は国内の農産物の不足分を補うには十分ではなかったことの指摘は重要である。

「E 軍備拡張期における危機と隘路」では、ダレーの農民保護といった農業政策が、その意に反して実際には農民、特に零細経営である農民の困窮を招いたことが指摘される。これとは逆に、ダレーが敵視していた大土地所有の経営はむしろ比較的安定していたことが触れられている。また、第二次世界大戦勃発前には、あらゆる農産物は満足な状態とはおよそ掛け離れたものであり、農村は不平と不満で充満していたことの指摘は興味深い。戦争が勃発するや、帝国食糧身分団や四カ年計画における農業部門の責任者であるバックは、ナチ指導部に広範な要求を突き付けたが、とりわけ「農民醇化経済の危機 (Krise der bäuerlichen Veredelungswirtschaft)」をその中心に据えた。というのは、当時の価格の統計が示すように畜産業の状況が悪化していたからである。バックが繰り返しこれらの価格引上げを要求したことが触れられている。この要求に強く反対したが、ヘス (R. Heß) であった。ここでとりわけ興味深いのは、バックやダレーが覚書において、これまでの工業利益に明らかに

有利な経済政策を批判したという指摘である。また、一九三九年において、ダレーがこれまでなされてきた政策の完全な失敗を自ら認めたことを示す史料の「発掘」は、第三帝国における農業政策を評価する上で、極めて重要である。

さらに注目されるのは、ナチスが農民に対して「血と土」といったスローガンの下で行った約束を実行できなかったという主張である。しかも、ナチス国家の指導部が、重工業の発展を優先的に促進し、来るべき戦争に備えて、高度な軍備を可能にするために他のあらゆる利益はむしろないがしろにされたといった指摘は、第三帝国における経済政策の性格並びに農業界を含めた経済界における力関係を考察する上で、重要な視点を与えているといえよう（後述、五参照）。

「F 拡張された『生存圏』における戦時食糧経済」では、ダレーの農民に友好的な態度は、もはや問題にはならなかったことが強調される。それ故、戦時下においては、農村において農婦の間でもかなり険悪な雰囲気醸し出されていた事実が明らかにされている。また、戦時食糧経済が占領した地域からの食糧の搾取を前提としており、この搾取が第三帝国の繁栄の前提であったといった指摘は重要である。ここでと

りわけ興味深かったのは、戦時下において一九四四年三月までにドイツがロシアから九〇〇万トン以上の穀物、三三〇万トン以上の馬鈴薯、二五〇万トン以上の飼料を強奪し、さらに、ソ連農業は戦時中において、七〇〇万頭の馬、一七〇〇万頭の牛、二〇〇〇万頭の豚を喪失し、七万以上の村が破壊されたといった事実の指摘である。そして、第三帝国のアウトアルキー並びに征服の夢がドイツの完全な敗北といった物質的並びに精神的な破壊をもたらしたことが強調されて、解題は締め括られている。

五

以上が評者が興味深いと思った解題の内容についての大まかな紹介である。最後に本書に関する論評を幾つか述べて結びに代えたい。

まず、本書はダレーの農業イデオロギーと彼の農業政策に関連する多種多様なテーマについて幅広く史料を掲載した史料集として有益なわけではあるが、逆にテーマを絞らなかつたため、それぞれのテーマに関しては関係史料が量的に少な

いといった問題が生じている。もちろん、本書はダレーのイデオロギーと政策に関連するさまざまな史料を幅広く掲載することを目的とした史料集であるため、それぞれのテーマに關係する史料が量的に少ないのは仕方がないことではある。

しかし、史料の質に関していうならば、或るテーマでは従来あまり利用されなかつたり、殆ど言及されなかつた史料が掲載されているのに対して、或る他のテーマでは逆に目新しい史料が極端に少ないといったバラツキもまた生じているのである。⁽⁶⁾あくまでも、本書は副題にあるように「ヒトラー国家における人種的イデオロギーと農業政策」に関連する広範なテーマの史料案内を兼ねた史料集と考えるべきなのである。⁽⁷⁾

本書の解題において、ダレーの農業政策とフーゲンベルクの農業政策の連続性が強調されており、これに対しては評者は全く同意見なのであるが、フーゲンベルクの農業政策とダレーの後任であるバッケの農業政策とは一体どう關係するのといった問題については殆ど触れられてはいない。また、解題においてダレーとバッケとの農業政策の相違について興味深い指摘があるものの、その相違を生み出したものが一体

何であるのか、その際両者の農業イデオロギー上の相違は在るのかといった点については、これらの答えを示唆する史料を掲載しているにも拘らず、解題では言及されていない。こうした問題は第三帝国の農業政策と伝統的保守派の農業政策の連続と非連続並びに第三帝国における農業政策の転換といった問題を考える際にも重要なポイントである故、是非とも解題において触れて欲しいところであった。

解題において、第三帝国の経済政策の主たる目標が重工業の発展にあり、農業は序々に脇へと追いやられたことが何度も史料とともに強調されている。⁽⁸⁾この指摘は、第三帝国においては経済界内部のヘゲモニーが重工業界側にあつたといつた主張にも連なる。このことは、経済界内部の主導権がフーゲンベルク、シャハト (H. Schacht) を経て、ゲーリングへと移つたことを示唆しているといえよう。ウンカーの政治的代表者であつたフーゲンベルクから、重工業界の政治的代表者たるシャハト、ゲーリングへと主導権が変遷したことは、経済界内部のヘゲモニーが農業界から重工業界へと移行したことを意味する。このことは、逆にいえば、農業界、とりわけウンカーが経済政策の決定過程における政治的な影響力

を、第三帝国においては、序々に失っていったことを示しているといえよう。

その一方で、本書ではユンカーの政治的代表者たるフーゲンベルクから、農民の政治的代表者たるダレーへ、さらにはナチスの古参議員で四カ年計画庁の農業生産局長でもあった食糧省次官バッケへと、農業界内部における主導権が移行していったことが史料と解題によって明らかにされている。このことは、第三帝国においてはユンカー層から農民層へ農業界のヘゲモニーが移り、さらには四カ年計画庁を中心とした官僚層へと農業界のヘゲモニーが移っていったことを示唆している。少なくとも第三帝国においては、ユンカー層は農業政策の決定過程においても、当初支配的だった影響力を喪失していったことが、本書での史料と解題から読み取ることができるのである。

このように本書の史料と解題からではあるが、第三帝国ではユンカー層は経済界においては工業界、とりわけ重工業界にそのヘゲモニーを奪われ、農業界においてもそのヘゲモニーを農民層に、さらには官僚層に奪われていったことが窺える⁽¹⁾。しかし、本書では主たる視角がダレーの農業イデオロ

ギーと農業政策に置かれているために、経済界内部における農業界と工業界との力関係や農業界内部におけるユンカー層や農民層との力関係などを検討する際の、史料が薄弱であるといわざるを得ない。今後、さらに第三帝国における農業界内部におけるヘゲモニーの移行といった観点からも、第三帝国の権力構造を動態的に捉える必要があると思われる。そして、その際に官僚層をどのように位置づけるかといった課題も残されているといえよう。

第三帝国の農業界における官僚層の問題を考える際に、ダレーやバッケといった政治的指導者と並んで、彼らが依拠した帝国食糧身分団や食糧省並びに四カ年計画庁といった行政・官僚組織間の関係についても検討する必要があるといえる。とりわけ、第三帝国の農業界においても権限を増大させてくる四カ年計画庁と食糧省との競合関係に着目することが重要である。主として第三帝国における農業政策は、ダレーの「血と土」政策がトップダウンで展開されたというよりも、むしろ官僚組織間における権限争いのなかで主導権を握った四カ年計画庁によって展開されたものであり、この意味で官僚組織主導によってなされてきたともいえるものである。

以上のような択え方をした場合、第三帝国の権力構造を考
える上で重要な問題となるのは、官僚組織とヒトラーとの関
係であろう。ヒトラーは農業政策一般に関してはさほどの関
心は示さなかったが、しかし、本書でも触れられているよう
に食糧問題といった領域にはかなり関心を払っていた。すな
わち、農業政策でも軍事経済に関わる領域においては、ヒト
ラーの関心はかなり高かったのである。こうした点を考慮す
るならば、農業政策においてもヒトラーの関心の高い領域で
はヒトラーのイニシアチブが強く働き、低い領域では官僚組
織主導の下で政策が立案、決定、執行されていたということが
指摘できよう。⁽¹⁾

第三帝国の農業政策の決定過程におけるヒトラーを官僚組
織との関係のなかで位置づける際には、まず農業政策の領域
ごとに異なるヒトラーの関心の高低を確認し、次にそれぞれ
の領域ごとに異なるヒトラーと官僚組織との関係を把握した
上で、最後に農業政策の領域全体における両者の関係を統一
的に論じることが不可欠である。そうして初めて第三帝国の
農業政策の領域全体における権力構造の全貌が見えてくると
いえる。そのための手掛かりとして、本書は農業政策のほほ

領域全体にわたって関連する史料を提示しているのである。
しかし、繰り返しになるが、本書はあくまでもダレーの農業
イデオロギーと彼の農業政策を中心とした構成となっている
ために、ダレーが農業界における主導権を喪失した後につい
ては、あまり重点が置かれていない故、大戦勃発以後につい
ては史料の基盤が相対的に弱いといった限界がある。

にも拘らず、本書は第三帝国の農業政策を検討する際には、
必要不可欠の史料と研究史上の重要な情報を含んでおり、ダ
レーや農業政策の研究者のみならず、第三帝国の権力構造に
関心を抱く研究者にも有益な史料集であるといえよう。本書
を踏まえた上での、これらの分野の一層の研究の進展が望ま
れる。

註

(1) G. Corni, *Hitler and the Peasants. Agrarian Policy of the Third Reich, 1930-1939*, translated by D. Kerr, New York / Oxford / Munich 1990.

(2) H. Gies, *NSDAP und landwirtschaftliche Organisation in der Endphase der Weimarer Republik*, in: *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*, Jg.15 (1967), S.341-376.

Ders., Die nationalsozialistische Machtergreifung auf dem agrarpolitischen Sektor, in: *Zeitschrift für Agrarwissenschaft und Agrarzoologie*, Jg. 16 (1968), S. 210-232.

(3) ただ、本書のテーマに関する研究文献がすべてにわたって網羅されているわけではない。特に、第三帝国の農業政策に対する各地域、とりわけ東エルベ地域の農村住民の反応について考察した重要な研究が幾つか漏れている(但し、例外的にバイエルンについてはほぼ網羅されている)。

(4) 伊集院立「一九三〇年のナチスの農業政策とヴァルター・ダレー革命的農民の千年王国カエリート的人種論的職能身分国家か」、『茨城大学教養部紀要』第一七号、一九八五年、一〇二二頁、豊永泰子『ドイツ農村におけるナチズムへの道』ミネルヴァ書房、一九九四年、中村幹雄『ナチ党の思想と運動』名古屋大学出版会、一九九〇年。

(5) R. W. Darré, *Das Bauerntum als Lebensquell der Nordischen Rasse*, München 1929.

(6) 例えば、コルニーはフーゲンベルクとダレーの農業政策の連続性を強調するわけではあるが(註8を参照)、ここではフーゲンベルクの農業政策に関する史料は、わずか三つしか掲載されていない(Quellen Nr. 74, 75, 76)。しかも七四番の史料は、出典はコブレンツの連邦文書館(Bundesarchiv/Koblenz, R 43 I, Bd. 1460, Bl. 15ff.) になってくるが、七五番の史料と同様に、実は既に刊行史料たる *Akten der Reichskanzlei, Regierung Hitler 1933-1938. Teil I: 1933/34*, Bd. 1, bearb. von K. H. Minuth, Boppard am

Rhein 1983, Dok. Nr. 31, S. 125-128 に掲載されている。

(7) というのは、本書は学生を始め幅広い読者を想定した「歴史ヤウナー(Historisches Seminar)」シリーズの第五巻として出版されたものでもあさからである。

(8) この部分は、コルニーが既に別の論文において、力説したところである。 Cf. G. Corni, Alfred Hugenberg as Minister of Agriculture: Interlude or Continuity?, in: *German History*, Vol. 7 (1989), No. 2, pp. 204-225. 因みにこの論文は序にあたる部分を大幅に削除修正したうえで、Corni, *op. cit.*, pp. 39-65 に収録されている。なお、註6も参照。

(9) 例えば、本書では触れられていないが、ヒトラー内閣初期に発布された「ドイツ農業債務整理法」は、債務整理に関するナチスの「思ひ切った處置」として戦中の日本でも紹介されたほどであったが(山田晟「ドイツ農業債務整理法について(一)」、『法学協会雑誌』第六〇巻第一号、一九四二年、二二頁)、実はこれはフーゲンベルクが一九三〇年十二月に国会に提出した計画(Hugenbergs Rettungsprogramm für die Landwirtschaft, in: *Unsere Partei*, Nr. 1, v. 1.1.1931, S. 2-10)を彼がこの時期に実施したものであり、ナチス独自の農業政策ではない。ダレーはフーゲンベルクの「農業債務整理法」をその後も引き継いだだけなのである。なお、ヒトラー内閣におけるフーゲンベルクの農業政策の概観については、拙稿「ヒトラー内閣におけるフーゲンベルクの経済政策」、『九州歴史科学』第二二号、一九九三年、七二-一五頁を

参照。

(10) 同様の主旨の指摘は、栗原優『第二次世界大戦の勃発―ヒトラーとドイツ帝国主義―』名古屋大学出版会、一九九四年、二三七、三五五頁にある。

(11) 以上の指摘は、本書の解題において明示的に述べられてはいない。しかし、評者の問題意識に基づいて本書の解題と史料を読む限りにおいては、仮説の段階にとどまるものの、こうした主張は可能なように思われる。もちろん、本書の解題と史料だけからこうした主張を行うのは不十分であり、今後、広範な史資料に基づいてさらに検討していく必要があるが、これらについては評者の今後の課題である。

(12) こうした指摘は、田嶋信雄『ナチズム外交と「満洲国」』千倉書房、一九九二年、六八―八四頁から示唆を受けた。